

〈書評〉

坂井祐円著『仏教からケアを考える』

法蔵館、2015年

Yuen Sakai, *Buddhist Thought on Caring*

上智大学神学部特任教授・グリーンフケア研究所所長

島 蘭 進

Susumu Shimazono

グリーンフケア

第4号

2015年

上智大学グリーンフケア研究所

書評

坂井祐円著『仏教からケアを考える』

法蔵館、2015年

Yuen Sakai, *Buddhist Thought on Caring*

上智大学神学部特任教授・グリーンケア研究所所長

島 蘭 進

Susumu Shimazono

—
キリスト教文化を背景にもった西洋社会での展開に学びながら日本でも広がりつつあるスピリチュアルケアだが、日本の宗教文化を踏まえて自覚的に展開するところにはまだまだ至っていない。日本の宗教文化といっても多様であるが、仏教の立場からスピリチュアルケアをどのように捉えることができるか。著者はこの問題に正面から取り組み、仏教教義に基づくスピリチュアルケアの理論的な枠組みを提示するという形で、著者なりの答えをまとめあげた。多面的な学識と経験があいまって可能になる力業である。

著者は浄土真宗の寺院の出身で、大谷大学で仏教学を学び、愛知学院大学大学院修士課程で臨床心理学を修めた。その後、京都大学の大学院教育学研究科博士課程で博士論文をまとめた。本書はその博士論文がもとになっている。寺院や宗門での修道と仏教実践の経験、また、スクールカウンセラーとしての臨床心理実践の経験があり、その上に学際的な人文学的思想研究の研鑽が積み重ねられ、仕上げられた業績である。浄土真宗教学、大乘仏教、通仏教の3つの層が重なりあって構築されるとともに、現代の宗教思想の深まりを目指したと問題提起もなされており、野心的な試みと言える。

各省の表題は以下のとおりである。

序章 仏教とケアとの関わり

第一章 ヒューマニズムに基づくケアを超えて

第二章 先行する仏教的ケア論の検証

第三章 ケアする人の精神的態度

第四章 ケアする人の自己変容

第五章 ケアの関係性はどのように深まるのか——縁起——

第六章 ケアの関係性にはたらく生成力——聞法——

補論	ケアの関係性が死の向こう側に開かれること
第七章	死の向こう側に開かれることの意義——浄土——
第八章	死者に向けられるケア——回向供養——
第九章	死者との実存協同——還相の菩薩——
終章	仏教思想に基づくケア論から見えてくること

二

序章、第一章、第二章では、この分野のこれまでの思考枠組みをまとめて示すとともに、それを超えていくべき著者自身の「仏教的ケア論」の立場を示そうとしている。著者はスピリチュアリティ＝霊性とは何かを問うて、鈴木大拙の「霊性は無分別智である」という言明を引く。そして、「仏教とは、形のある世界、分別の世界を包括する、霊性的自覚において顕現するはたらきである」とする。また、スピリチュアリティをベルクソンの「動的宗教」（個々人の創造性と結びつくような開かれた宗教）に対応する心のあり方として捉え、人間の限界を強く自覚する以前の「静的宗教」（集団の結束に奉仕するが個人の深い経験に寄与することの乏しい宗教）とは異なる高次の「超越」に対応するものとする（五一―八頁）。

スピリチュアルケアはこうした霊性や超越を経験・会得した人に現れるケアのあり方とされる。それについては、まず、ケアする人が霊性＝スピリチュアリティによく通じていることが必要だとされる。また、ケアする人、ケアされる人の双方がともに経験する出来事や関係性としても捉えられている。後者の場合、ケアの場に霊性＝スピリチュアリティがはたらく特別な経験があるとされる。

ケアする人とケアされる人とが相互に関係し合い、影響し合うとき、その深まりにおいて、人間を超えた何らかのはたらきに包まれていると感ずることがある。このとき、ケアする人とケアされる人の意識過程では、それぞれが別々であるという感覚と同一であるという感覚が互換しつつ反復する状態から、しだいに感覚そのものがかき消えていき、互いに無意識的な領野へとゆっくり静かに沈潜していく。そして、そのような未分化な状態の中で、ケアの場が突出して開かれることとなり、それぞれの意識は、互いに脱中心化して、ケアの場に充溢するエネルギーに包み込まれて溶解していく。

（一七頁）

こうした経験が生じる関係性は生者と生者の間だけのことではなく、生者と死者との関係でも成り立ちうるという。

親しき者、愛する者と死に別れたときには、悲哀とともに死の向こう側に何らかの世界が広がっていてほしいと願うことであろう。「死者は生きている」という表現は、このことを象徴している。しかも、それはある臨界点を超えたとき、生活感情としての願望から、生者と死者との実存的な協同性へと転起することになる。死者は、観念

的で生態的な物語（記憶）であることをやめ、事故変容や精神的成熟をもたらす動態的な呼び声として、生者の前に立ち現れてくる。そうした死者と生者との動態的な交わりを「実存協同」と呼び習わすとすれな、これはケアの場にはたらくスピリチュアリティの広がりとして捉えることができるのではないか。そして、このことは、死の向こう側からのほたらきによって生者がケアされている、という実態を明らかにしていると考えられよう。（一八頁）

以上は序章からの引用だが、第九章で詳しく展開されるので、ここで論じられていることの私なりの理解は後に提示する。ここまでの叙述で、著者がスピリチュアルケアをどのようなものとして考えているかが、すでに輪郭を表わしているようである。

三

著者の主張の一つの要点は、現世的な次元と超越的な次元とが明確に分かれているような宗教性（明確な超越）を土台としない場合（民俗宗教などの宗教性）、スピリチュアリティやスピリチュアルケアとよばれるとしても不十分なものだという考え方だ。その上で、明確な「超越」を土台としていると解される「仏教的ケア」に対置されるのは「ヒューマニズムに基づくケア」であり、それは「超えて」いくべきものと論じられる。

心理学などの諸学科を土台としたケアが現在、「職業としてのケア」として行われているが、それらは「ヒューマニズムに基づくケア」の限界を負っているとされる。「ヒューマニズムに基づくケア」は「人間による適切なケアのはたらきが行われるならば、人間は困難で苦しい状況を克服して、自由や幸福な状態を手に入れることができる」（三六頁）という楽観に依拠している。しかし、こうした楽観に基づくケアは、難点を抱えているという。

共依存、共感疲労、バーンアウト、感情労働によるアイデンティティの危機、そしてパターンリズム、これらのケアに伴う弊害は、その根源を遡るならば、人間の根本的な存在様式であるケアへの欲求が、自己の存在意義を求める人間の傾向と密接に関わっており、そうした傾向のために引き起こされる事態であると言えるだろう。要するに、ケアへの欲求はケアの弊害と表裏一体であり、このような根本矛盾を抱えているところに、ヒューマニズムに基づくケアの限界があるのである。（三八―三九頁）

この論は逆に、著者が考えるようなスピリチュアルケアにおいて生じないものなのだろうかという疑問がわく。また、ここで示されているような限界を自覚しながらそれを超えていこうとするケアの実践も、現代の多様なケアにおいては目指されていると思う。著者の論は「あるべき仏教的ケア」を示すことに主眼があり、その分、現に行われている多様なスピリチュアルケアの思想や実践については冷淡なところがある。

四

だが、著者が考える「仏教的ケア」が机上の空論というわけではない。そのことは、第

第六章「ケアの関係性にはたらく生成力——聞法」という章を読むと分かってくる。ここでは、「仏教カウンセリング」について論じられている。とくに西光義敏（さいこうぎしやう）（一九二五—二〇〇五）の「真宗カウンセリング」が詳しく紹介され、ヒューマニズムに基づくカウンセリング理論の代表者であるカール・ロジャーズのケア論、および独自の宗教性を理論化しロジャーズに異を唱えたマルティン・ブーバーのケア論と比較しながらその特徴が示されている。

ロジャーズのカウンセリング理論は、臨床的人間関係という経験から仮説的に導き出され、自然科学的知識によって傍証されたものである。その限りでは、相対的なヒューマニズムの域を超え出ることはない。しかし、仏教の見方は、人間を超えた真実に照らされた深い洞察（智慧）によって覚証されたものであり、絶対的な霊性的自覚を根拠としているのである。／このようなロジャーズの人間理解に対する批判を経て、西光は相対的次元と絶対的次元との二重関係を構造化した図式を見出していく。（一六七—八頁）

カウンセリングの関係において、「私」と「あなた」（我と汝）の関係が成り立つとき、深い受容が成り立つためには「自己実現」を超えた超越的なものの可能性、あるいは「真理」の「確証」があるとブーバーはいう（一六一頁）。他方、西光の論では、「仏教（真宗）カウンセラーの内面に開かれ表象される超越の次元」、すなわち「仏」や「法」からの呼びかけがあり、「真宗カウンセラーは、〈仏〉の照らす慈光の中に、「私」とともにクライアントである「あなた」も包まれていると感じている」という（一六九頁）。この呼びかけを聞くのが「聞法」である。

無論、仏教的伝統に立つ西光と、ヘブライ的伝統に立つブーバーとでは、歴史文化的な文脈が異なっており、それぞれのもつ超越表象を安易に同一視すべきではない。しかしながら、両者の思想が、共通してヒューマニズムに基づくケアの限界について指摘し、そこから相対的な関係にはたらく生成力の原理を導き出している点を考えると、超越の次元への視座に開かれたケアの思想という意味で、西光とブーバーは見事に一致しているのではないだろうか。（一六九—一七〇頁）

第三章から第九章にかけて、「慈悲」「仏性」「縁起」「聞法」「浄土」「回向供養」「還相の菩薩」と、仏教用語を主題とした本論の各論が展開していくが、その中で第六章の「聞法」をめぐる論を詳しく紹介した。ここにはカウンセリングの実践を踏まえつつ、「ケアの思想」を考察してきた著者の思考が分かりやすく表現されていると感じたからである。

また、それ以前の三章は、通仏教、あるいは大乘仏教の概念に基づく論であるのに対し、「聞法」以後の章では、浄土真宗色が強く出てくる。だが、「聞法」の章では生者同士の関係性が主要な論題になるが、「浄土」以降の章では、「死」や「死者」や「他界」がクロズアップされていく。「仏教と真宗」および「関係性と死」という二つの基軸から見ると、
「聞法」を主題とする第六章は、その転換点にあるという点でも注目に値する。

五

第九章は「死者との実存協同」という主題からも、「還相の菩薩」という副題からもスピリチュアルケア、グリーフケアに関心をもつ多くの読者にとって難解でとっつきにくいものと思われるかもしれないが、何とかその論旨を紹介してみたい。ここで著者は、ケアする人とケアされる人の関係性という視点から、ケアされる死別体験者と死者の関係性という視点に移行し、そこでの超越性を「死の哲学」として示そうとしている。

死別体験者の心は、悲哀感情に包まれていると同時に、つねに死者と向き合っている状態にある。いや、むしろ死者が生者である死別体験者の心をつかんで離さないのだ。死者は絶えず生者に何らかのメッセージを送りつづけ、生者はこれに応えるべく沈潜していく。言うなればこれは、〈死者が生者をケアする〉状況である。ここにおいて、ケアする主体は死者ということになり、グリーフ・ケアとは、死者と生者との関係性において成立しているケアなのだ、と気づかされるのである。(二五七頁)

著者は「死者との実存協同」という田辺元の概念を用いて、グリーフ・ケアにおいては、「他者が自己をケアする」、「自己が自己をケアする」という要素を超えて、「死者が生者をケアする」という要素こそが重要なのだという。田辺の「死者の実存協同」という概念の意義については、著者は「死の存在学か死の弁証法か」という論考（全集第一三巻）から、以下の一節を引いている。

自己の復活は他人の愛を通じて実現せられる。自己のかくあらんことを生前に希って居た死者の、生者にとってその死後にまで不断に新にせられる愛が、死者に対する生者の愛を媒介にして絶えずはたらき、愛の交互的な実存協同として、死復活を行ぜしめるのである。(二五二頁)

「死者の復活」というような事態が生じるというのだが、それはどういう意味か。存在していない死者が生者の世界に堅固なリアリティをもって現出することがある。それによって、「自己を根本転換させ覚醒体験へと導く」ことが起こる。それは、死者が安らぎの世界にとどまらず、あえて生者の世界に来たり、生者の覚醒を導くという事態と田辺は見なしている。それは、菩薩が「仏になる資格を具備しながら、自らその能力を謙抑して、仏にならずにあえて菩薩の地位にとどまり、衆生済度の愛に生きようとする」のに似ており（二五三頁）、「菩薩道」「還相の菩薩（浄土往生後にこの世に還ってきて他者に働きかける菩薩のあり方）」に比せられるという。それは仏の超越性がケアの場に現われるという、本来的なスピリチュアルケアのもう一つのあり方だという。

このあたりの著者の説明は、必ずしも明快とは言えない。読者は「死者との実存協同」という哲学専門用語の喚起する荘重さに戸惑うかもしれない。以下の一節は、著者自身がそのことを気づいていることを示唆するものだ。

このような「死者との実存協同」が生み出す歴史的世界は、宗教的エリートにのみに開かれているわけではあるまい。むしろ死者との歪んだ関係を築いてきた者ほど、よ

り生々しいリアリティをもって死者の復活に遭遇するのではないか。とはいえ、田辺は、生前から続く生者と死者との愛による結びつきを、死者復活の条件に挙げていた。ならば、憎しみの関係にあった死者は復活することはないのか。あるいは、たとえ復活しても実存協同を生み出さないのか。(二六六頁)

死者が生者にスピリチュアルな問いを投げかけ、生者が死者とのやりとりを通じてスピリチュアリティを育てていくという事態はさまざまに生じうる。たとえば、戦死者や災害死者と生者の間にはさまざまな交渉があり、生者のスピリチュアルな成熟に資するという点に注目することには大いに意義がある。だが、「死者による生者のケア」といった概念を導入することにどこまで必然性があるのか、疑問が残るところだ。

六

以上は、本書に含まれる豊かな論題から、いくつかの論点を拾って紹介し、問いを投げかけたにすぎない。現代はスピリチュアリティやスピリチュアルケアについて、多くの議論がなされる時代だが、仏教の教義的概念を土台として、仏教思想の観点からスピリチュアリティやスピリチュアルケアを考え直そうとした論考はさほど多くはない。その点、本書はスピリチュアルケア論という領域においても、仏教思想論という領域においても、新たな次元を切り開く大きな意義をもつ業績と言えるだろう。グリーフケアとは何かを考える上でも学ぶべき点が少なくない。また、詳しく述べることはできなかったが、「慈悲」「縁起」「浄土」「回向供養」といった仏教教義概念の現代的な思想的可能性を問うという点でも示唆的な書物であることを指摘しておきたい。

ただ、多くの読者にとって近づきにくいところもあるように思う。まず、「ヒューマニズム」に基づくケアや、民俗宗教などの宗教性を土台としたスピリチュアルケアは、価値がないものとされ、ほとんどその意義を論じられていないが、これはケアに携わる多くの人々を除外するアプローチとならないだろうか。また、仏教や真宗に基づくケアのあり方こそが求めるべきものとして提出されているが、これも入り口を狭く限ってしまうことになりかねない。

特定宗教・宗派の思想や考え方を前提としたスピリチュアルケアへのアプローチには大いに価値があることは言うまでもないが、現代においては特定宗教・宗派の思想や考え方が前面に出たスピリチュアルケアでは、入っていけないという人も増えている。そうした人が近づきやすいスピリチュアルケアや心理学的ケアや心身相関的なケアにもそれなりの役割があるだろう。広く多様なスピリチュアルケアのあり方と初めから優劣をつけることなく関連づけ、比較していくような論じ方であれば、多方面の読者にさらに開かれた論となるだろう。

しかし、これらの批判的論点は今後の著者の仕事を通して、自ずから応答されていくことになると思う。本書の提示している論点は多方面に展開する可能性をもっており、今後、

諸論点につき活発な討議が生じていくことを願っている。